

ひかる ここに 物語



三木卓・編

かまくら春秋社

編者・三木 卓（みき・たく）

1935年生。作家・詩人。

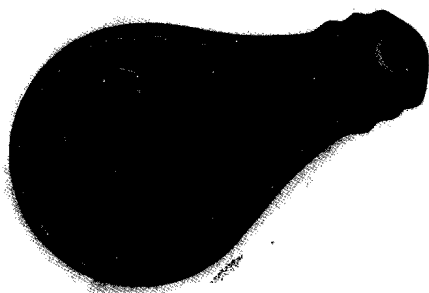
詩集「わがキディランド」で高見順賞、「鷄」で芥川賞、「路地」で谷崎潤一郎賞を受賞。児童文学にもペンをふるい、絵本「イヌのヒロシ」で路傍の石文学賞受賞。

こころにひかる物語	編者 三木 卓	発行者 伊藤玄二郎	発行所 (株)かまくら春秋社 鎌倉市小町二―一―五 電話〇四六七(二五)二八六四	印刷所 (株)和 晃	平成十一年四月三十日印刷発行
-----------	---------	-----------	--	------------	----------------

ひかる
物語
ここに

三木卓・編

江苏工业学院图书馆
藏书章



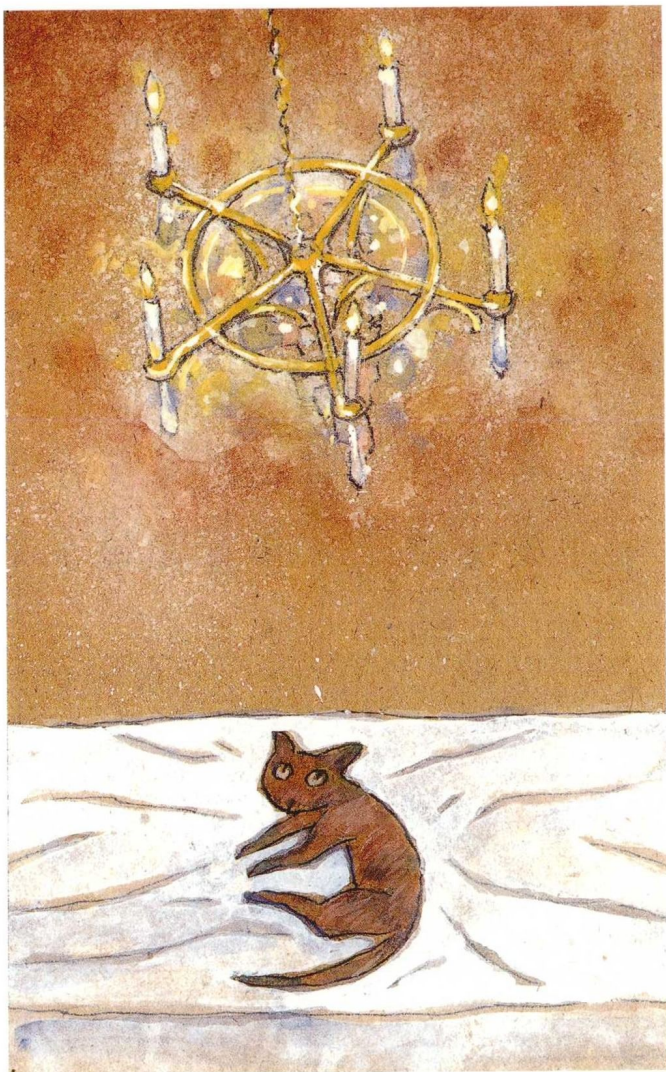
● 目次

シャンデリア	安西 篤子	4
風の中のテレビ	荒川 洋治	8
ナイトランプ	山本 道子	12
寝顔	太田 治子	16
ウソの神秘	白石かずこ	20
ナイターの灯り	ねじめ正一	24
懐かしのラジオ	畑山 博	28
灯りのもとの虫たち	井坂 洋子	32
燈りが目に染みる	中沢 けい	36
王国	岡松 和夫	40
古本屋の灯り	富岡幸一郎	44
光と闇	E P O	48
形見のスタンド	中野 孝次	52
生きて来年も、再来年も	木庭久美子	56
読書の明かり	高田 宏	60
振り仰ぐ光	斎藤 栄	64

盆提灯の家	倉本 四郎	68
仔熊のツリー	林 京子	72
夜となく昼となく	尾崎 秀樹	76
風と光とのつきあい	黒井 千次	80
灯り	養老 孟司	84
海の灯り	斎藤 茂太	88
拜んで眺めた街頭テレビ	村松 友視	92
大停電と雪の灯	尾崎左永子	96
こころのともしび	西丸 與一	100
人明かりの中で	山崎 洋子	104
明るい部屋	松居スーザン	108
暗さの効果	山川 静夫	112
アジアの闇と光	田村能里子	116
完全犯罪の記	萩野アンナ	120
あとがき	三木 卓	124

カバー画・挿画
装幀 多田 進
吉野晃希男

シャンデリア ❖ 安西篤子



いまから二十数年前の一時期、私はかなり辛い日々を過ごしていた。

離婚して家を出、世田谷で一人暮らしをはじめた。マンションとは名ばかりの、六畳・三畳にちいさいキッチンのついた住居である。

子どもたちにも思うように逢えず、文学賞をもらったものの、いっこうにまとまった小説も書けず、気分は暗く落ちこんでいく。

同じ小田急の沿線に住む女友達が、そんな私を憐れんで、ときどき行楽に誘ってくれた。

その友人が、家を新築した。旦那様が一流企業の幹部であるばかりか、父上も某酒造会社の創業者で、多額の遺産を受けとっているのです。隔々まで友人の好みを生かした、すばらしい邸宅である。

工事の進んでいるある日、その友人が私のところへ電話をかけてきた。これから秋葉原へ照明器具を探しに行くので、いっしょに来ないかとの誘いである。

これといって用事のない私は、喜んでついて行くことにした。

有名なその店は、いわば電気器具のデパートで、各フロアに電化製品が溢れている。私たちはエレベーターに乗って、照明器具のフロアに上った。

友人はときどき私に相談しながら、客間や居間に使うペンダントやスタンドなどを決めていく。一通り決めた友人が店員と交渉している間、私はぶらぶらとその辺を見て廻った。すると、シャンデリアの一つが眼にとまった。

私はもともと衣食住のうち、衣にも食にもあまりこだわらないが、家具を見るのは好きだった。体一つで婚家を出てきた私は、経済的にも余裕のない生活で、ベッドと仕事机のほかはな

にもない部屋だが、そこへこのシャンデリアを吊るしてみたくなった。

それは、新しいデザインのモダンなものではなく、たとえばルキノ・ヴィスコンティの映画に出てきそうな装飾沢山の古典的な形をしている。金色の枝が四方八方に突き出し、そこへカットされたガラス玉がいっぱい、下がっており、ローソク型の電球が五本立っている。もちろん、貴族の邸に使われているような壮大なものではなく、その十分の一くらいの大きさで、私の狭い部屋にもおさまりそうだった。

値札を見ると、むろん安くはない。私はそのころアルバイトで週に三日、テレビの司会者を勤めていたが、ちょうどその一週間分の出演料が吹つとぶ額である。

用事を済ませた友人が、私の傍へきた。私が迷っているのを見て、「お買いなさいな」とすすめてくれた。

友人は私の貧弱な部屋を知らない。しかし欲しいものを手に入れて私の気分が晴れば、と考えてくれたのであろう。

ようやく決心して私はそのシャンデリアを家へ届けてくれるように、店員に頼んだ。その店の上得意とみえる友人が交渉して、端数の分だけ値引きしてもらった。

幾日かしてシャンデリアが届いたので、私は近所の電気屋さんに取付を頼んだ。

そのシャンデリアは、見た目よりもはるかに重量がかかった。電気屋さんは、部屋の天井がその重みに耐えるかどうか心配したが、どうやらうまく取付けられた。

以来、毎晩、私はベッドに横になって、ローソク型の電球を灯し、プリズムに当たってきらめく光を楽しんだ。

誤算だったのは、期待したほど明るくない点である。部屋の天井がどういいうわけか小豆色に塗られているせいで、光が吸われてしまう。

しかしそれでも私は、充分、満足だった。貧しい部屋に吊るされたシャンデリアは、第三者が見れば、まさにマンガであつたろう。皮肉屋の友達の一人は、「シャンデリアぐらいで憂鬱が晴れるなら、安いものだな」と笑った。

それは私にもよくわかつている。

けれども、部屋に不似合いの豪華なシャンデリアは、たしかに当時の私の気分を明るくしてくれた。

なぜ電気器具店でそのシャンデリアを見たとき、一眼で欲しくなったのか、私は考えてみたこともなかったが、いま思えば、子どものころにしばらく住んだベルリンの家の客間に、よく似たシャンデリアがあつた。それが記憶に残っていたのであろう。

シャンデリアのおかげばかりでもなからうが、私はノイローゼにもならず、どうやら危機を乗り切ることができた。

その後、世田谷から横浜と引越すにつれて、シャンデリアもいっしょに移動して、いまは鎌倉の家の寝室に取り付けてある。ときどきガラス部分を磨いてやると、むかしに変わらぬ多彩な輝きをみせてくれる。

あんざい・あつこ 作家。一九二七年生。「張少子の話」で直木賞、「黒鳥」で女流文学賞。「歴史に抗う女たち」「空白の瞬間」等。

風の中のテレビ



荒川洋治



ほくのいなかは雪国。日本海沿いの村である。

テレビがやって来たのは、小学校の四年の頃。皇太子ご成婚をテレビで見ようということで、みんながテレビを買った時期である。

それまではラジオだった。夕方の六時前だったと思う。「コロの物語」（乾信一郎・作）というラジオ番組があった。子供のほくは楽しみにしていた。

「コロっ、コロっ、コロっ」という歌が流れる。「コロの物語」のはじまりである。ほくはふとんに入り、じっと耳をかたむける。聴きおわると、眠ってしまう。シンプルな生活だった。当時は、みんな早い時間に眠った。まだ夜でもないのに、寝てしまう。起きていても楽しみがないからだ。それがラジオの時代だった。いまでもいなかに行くと、寝るのが早い。七時くらいになると店も閉まって人通りがたえる町も多い。都会暮らしになれると、夜がたつぷりある地方の暮らしは、まぼろしかと思うほどである。

そこにテレビがやって来た。

わが家に来るまでには時間がかかった。サンタクロースと同じである。早く寝なさいよ、ほら、高田くんのおうちのところまで、サンタクロースが来たよ、もうすぐだよ、と母がいう。たいへんだ、早く眠らなくては。そして、高田くん、中村くんの家の次に、サンタさんはやって来る。

テレビは、まず裕福な家にやって来た。学校の帰り、その家に子供たちが集まった。大相撲やプロレスを見た。もったいぶって、なかなか見せてくれない家もあった。それから少しずつ石段を下るようにして、ほくの家にちかづく。

テレビが入ってきたとき、ぼくはどんな気持ちだったか。はつきりとはおぼえていない。でも、お隣の人がぼくの家に入ってきたことはおぼえている。

お隣はまだテレビがないので、おおみそかなどは、一家で来た。紅白歌合戦を見るために。「ごめんください」といつて。ぼくらは家族だけだと、いつもはねっころばって見ているのに、その日はお客さんがいる。テレビを見ても、くつろげない。「みかんを食べましょうか」なんて、上品な言葉をつかいあう。

当時のテレビ番組で印象的なのは、関西の民放の番組、それもお笑い番組だ。大村崑、佐々十郎などは特におもしろかった。おなかをかかえて笑った。

大阪、京都は遠いのだけれど、東京よりは近いので、関西の番組が多くなる。子供のときに関西の世界にふれたことは、ぼくの一生を決定したかもしれない。

どちらかというと、東京はすました文化。関西は、正直の文化。ほんねをさらす。自分を笑ってみせる。そしてまたそれが楽しそうなのだった。そこがぼくは好きだった。

そんな関西風のライフスタイルをぼくは知らず知らずのうちに、身につけたように思う。詩を書くときの題材や、言葉もそうである。そこがいいことかどうかはともかく、テレビのおかげで、正直に生きる楽しさを知った。

それからもう三十五年ほどたってしまったが、最初にテレビを見たとき、テレビから渡された感覚は、いまもぼくのなかに生きているように思う。

また、いまはずいぶん安くなっているが、テレビは高価なものだった。どの家にもあるものではない、というふうに使われた。

何年か前、中国の奥地、雲南省の村に行った。村の人たちが、一台のテレビをかこんでいる。いわゆる街頭テレビだ。おとなも子供もおおぜい集まっている。その人たちの目の輝きを見たとき、ぼくの子供時代がよみがえった。きつといつかこの村にも、サンタクロースのように、一軒、一軒、たずね歩いて、テレビがやって来るのだろう。

テレビはゆっくり歩いてきたのだった。時はゆっくり流れていた。

この間、久しぶりにいなかの家に帰った。夜の九時を過ぎていた。あたりはまっくらである。日本海の冷たい北風が、闇のなかをびゅうびゅう吹いている。海からの風を松林ひとつでは防ぎきれないのだ。

家は、冬の風のなかで震えていた。それはいつものことなのである。でもこうして、闇のほうから家を見つめると、自分の家が、いったいどこいうところにあるのか、よくわかった。家という建物の思いさえも感じられるように思った。

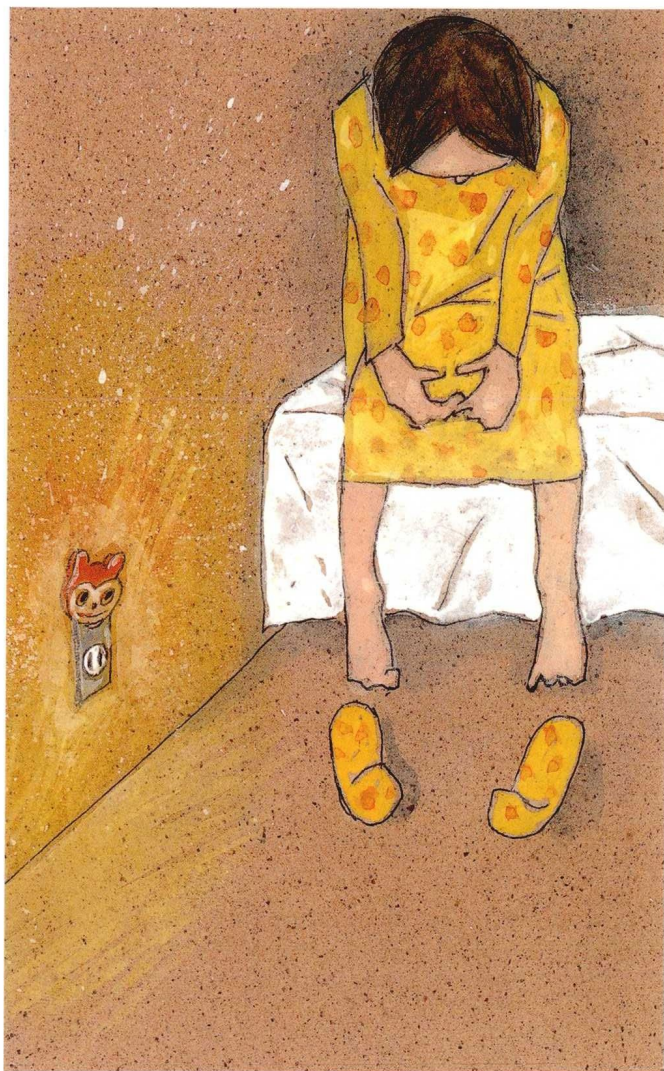
ぼくは知る。こんなにきびしい自然がぼくの家をとりまいていたのだと。ここで生まれ、眠り、育ったのだと。テレビも、そしてなにもかもが、風のなかを歩いて来たのだ。

あらかわ・ようじ 詩人。一九四九年生。「水
駅」でH氏賞、「渡世」で高見順賞。エッセイ
集に「言葉のラジオ」「夜のある町で」等。

ナイトランプ



山本道子



わたしがこどもの頃にはほとんどみかけなかったものにナイトランプがある。

寝室の足もとだけを照らす燭光の弱い豆ランプで、ベッドの足もとや壁面の床に近い低位置に直接コンセントをさしこむようになっていた。

実用品であるとうじに、だいたいが装飾的にデザインされていて、めだたないところでこどもたちに人気のあるちいさな常夜灯である。

二人の娘が乳幼児のころはオーストラリアで、さらに小中学校時代になってからはアメリカでというふうには、二度にわたって外国暮らしを経験させられたせいから、ナイトランプは欠かせない生活用品だった。

こどもたちと両親の寝室は別になっているので、ことに夜中の明かりはかかせない。住居をかえるごとに、こどもたちは自分の寝室に好みのナイトランプを灯していた。

結婚と同時にアメリカへ飛び立っていった長女の部屋で、一個のナイトランプをみつけたとき、わたしはなんともいえないおもいにとらわれた。

直径五センチほどの円形のそれは、全体がミッキーマウスの顔になっている。ながいあいだ忘れていたそれは、シアトルに住んでいたとき、家族で遊びにいったデイズニールランドの売店で、こどもたちが自分で買ったものだ。

自室をきれいに片づけてから娘は去っていったが、ベッドの足もとにころんと転がっていたナイトランプを手にとって、わたしはほんのすこし感傷にひたった。

裏を返すとコンセントのあいだに1・2W—125Vとあって、その下にUSAとしるされている。燭光は極めて弱いんだけど、ミッキーマウスの顔以外はオレンジいろなので、暗や

みのなかでコンセントをさしこむと、おもいのほか明るいひかりが点る。

夜ごと彼女の寝室にこうして灯っていたのだろうか。そんなことをおもってしんみりすると、ちいさな明かりが温かくみえる。

もうひとつ忘れられないナイトランプがある。

二度目の出産はオーストラリアであつたが、生まれたばかりの娘は夜泣きが激しくて、さんざん苦勞させられた。なにしろ季節感の乏しい亜熱帯地方のことで、年柄年中、昼も夜も「暑い暑い」の暮らしのなかで、母親も嬰兒もそうとうにまいていた。泣く子を抱きあげる氣力もなく、ベビーベッドのかたわらにうずくまつて過ぐす夜がつづいていたが、そのとき部屋の隅にともっていたのが、ナイトランプだつた。

ふた昔も前のことなのに、ぼんやりした明かりをいまだにはつきりおぼえているのは、当時の若かつた母親としては、産後の疲れがよほどきつかつたのだろう。

なにしろ強烈な太陽から逃れるには、夜をまつしかない。日中の弾けるようなひかりの渦は、日没をすべり落ちてすつぱりと裏返つたように真闇になる。その地では闇の深さもまたかくべつだつた。

泣き疲れてようやく眠りはじめるまで、生まれたばかりの子とふたりきりで、闇に沈んでいたときは、いまにしておもえばほんの一時のことだったかもしれない。しかし床にながれていたほのかな明かりの、なんとやさしかつたことだろう。明かりは白い壁にもほんのりとひろがつていた。

それはオレンジ色の花模様からこぼれるちいさな燭光だつた。「ベビーのお部屋にはこれが

いいね」といって三歳の長女が、店先で選んだものだった。

いまでも旅先でホテルの部屋におちつくと、真っ先にナイトランプが気になる。最近ではサイドテーブルの床に近いどこかに、たいてい電灯が埋めこまれていたり、室内の段差のわずかな部分から、明かりが漏れるようになっていた。

しかし私も齢をかさねたせいかな、ナイトランプを気にするわりには、もうそんなものはどうでもいいというのがほんとうのところである。旅のあいだは、昼間の疲れで横になると欲も得もなく眠ってしまうし、乗り物のなかでも居眠りするぐらいだから、夜の闇にはナイトランプということもなくなった。

それにつけても、燭光はなんといっても、すつきりして、ひんやりした、蛍光より、オレンジ色の白色灯のほうがいい。

あれもこれもと憶いだせるだけでも、可憐なナイトランプがいくつかあるのに、みんなどこかへ消えてしまった。

やまもと・みちこ 作家。一九三六年生。「ベ
ティさんの庭」で芥川賞、「ひとの樹」で女流
文学賞、「喪服の子」で泉鏡花賞等。